へら鮒

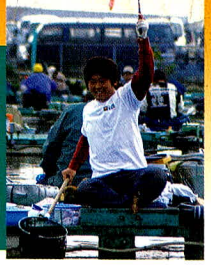
Monthly fishing magazine herabuna Contents

「へら鮒」の題字/叶 九隻

No.450 Jun.2003 6

●今月の表紙●

今月は、ついに表紙初登場の杉山達也だ！
羽生吉沼、岩手桟橋に道具を置いた杉山。
いきなり新べらを絞り始め、徐々に型が良くなっていくという、戦慄の走る釣りを展開！
超満員の羽生吉沼が震撼する…。
これぞ杉山達也。
驚愕の両グルsplashを見よ！



4 **特集**

西湖開幕スペシャル。

西湖の藻場を知らずして、へら鮒釣りを語ることなかれ…。
春の大本命「前浜」&「桑留比」パーフェクトガイド！
そして、名手・伊藤洋一が開幕直後の前浜に乗り込む！
超強烈、乗込み西湖べらの爆釣ポイント&爆釣法とは？

伊藤洋一

177 **特集Ⅱ** *Spritual field, LAKE KANNA!*

神流湖スーパーガイド

神の棲む湖に、取り憑かれし物達…。

藤田 保&栗原盛行

18 名手・石井旭舟がいく、へら鮒出会い旅… へらぶな浪漫街道
《第六回》大通川〈おおどおりがわ〉（新潟県白根市）

26 スーパーアングラー小池忠教のエサ合わせ大全
《Vol.6》桜咲く三島湖で粘釣！ 小池流試釣とは!?

34 大型狙いの楽釣宣言！ 山内研作&生井澤 聡
《第6回》手賀南新堀&甚兵衛広沼（千葉県）

40 緊急掲載！「クラブ50」途中経過報告。

42 棚網 久の対決mode 1, 2, 3!
《Battle.27》加須吉沼で超絶バトル!
チャレンジャー:寺崎智祥 VSトーナメンター:古川 実

118 杉山達也のSPLASH BEATⅡ
《Vol.6》日曜日、超満員の羽生吉沼で竿頭を奪取せよ。

124 DUELアングラーズミーティング開催！ 椎の木湖

126 田辺哲男の「それってどーゆーことよ!?」
《Vol.6》戸井田祐一の 'MORE BITE' スタイル!!
丹生湖（群馬県富岡市） ゲスト 戸井田祐一

130 熱血釣り女・吉川ひとみがいく！「へらってヤバイわっ!!」
《第12回》豪雨の早霧湖はバックバク!?
FIELD：静岡県修善寺町 早霧湖 GUEST:熊谷 充さん

134 釣りクラブ見参！
《第45回》新座へら鮒虹釣会 筑波湖（茨城県）

136 頑固一徹！ 自分の釣りを貫き通す男
《今月の釣り人》底釣りに徹する人 生井澤 誠さん

138 竹は活きている
⑥富士竹類植物園

140 列島縦断 旅するカメラ
《千葉県33》館山～千倉 真野のセキほか

188 西日本川釣り紀行 北川穂積
《第6回》加茂川（岡山県玉野市）

192 フィッシングレディ
《今月のレディ》大久保準子さん 野田幸手園（千葉県野田市）

50 電話で突撃!! 関東近辺釣り場情報

★エリアレポート

54 赤田公園の池（熊本県） 河口正伸
56 赤祖父湖（富山県） 山本一朗
57 高山ダム（京都府、奈良、三重県） 前田誠志
58 勝賀大池（岐阜県） 後藤 誠

60 新連載 あらいしのぶの始めてみようよ、へら鮒釣り♡
《第2回》へら竿ってどんな竿なの???

62 ガッツ小林が攻めまくる 若さとファイトの激釣記
《第11回》寺山沼（埼玉県さいたま市）

68 人間カーナビ稲毛利夫の実釣！野べら釣り歩き
《第6回》冨士山自然公園の池ほか（栃木県芳賀町）

73 江成公隆のトーナメンター、復活への道。
佐原水郷が生んだ奇才・北城 錦登場!!
《Vol.12》北城 錦の底釣りゼミ⑥ ～江成の復習ノート～

82 GOZYUKKAMI TREASURE HUNTER アマヤン 天野正由
《その6》芦ノ湖・サクラ・蕾ふくらむ
荒川・羽根倉橋～相模川・猿ケ島、旧昭和橋～芦ノ湖

86 水辺のプラネタリウム 吉本亜土
《今月の星空》「地下の魚 天上の魚2」

91 元気が出るへら鮒 西田美明
《第6回》「巨べら命」の巻

94 本誌イケイケ編集長が斬る！ 業界のタブーに迫る!!
《第6回》どうしたらインストラクターになれるのか?④

98 最狂ヘラ戦士養成所"鮒の穴" 高橋謙司
《第五話》今月の指令:「釣りは鮒に始まり鮒に終わる」を実践せよ!

102 野田幸手園新聞

104 ワクワク管理釣り場情報

108 小売店情報

146 旅するカメラ 取材番外 思い出話
《第5回》回った釣り場は2000カ所以上

149 竹、合成竿を使用した 未開の釣り場 釣行記
《その14》印旛新川（千葉県八千代市）

154 NHC日本へらぶなトーナメント2003開催迫る！

156 日本釣りジャーナリスト協議会主催
ジュニア体験釣り教室開催 上尾園

★へら鮒BOX

161 里ちゃんの新米編集長雑記
162 情報地獄ミミ
164 ボイス
170 新連載 新人モロちゃん奮闘記
171 プレゼント発表
172 釣果予想クイズ

175 広告索引
176 編集後記

※「人物往来」「わが輩はへら鮒である」は誌面の都合により休ませていただきます。

この物語は、
栄光、そして挫折を味わい、
今、再び這い上がろうとする一人の男の人間ドラマである。

江成公隆の トーナメンター、復活への道。

text and photo by Kimitaka Enari and Satoshi Tanaka
業界初、Web連動企画！ 《URL》http://hesar.yokohamatsurumi.net

待ちくたびれたぜ！　怒濤の「底釣りゼミ」第6回！
今月は江成のワガママ♡により、増ページでお届けする。
だが先に結論を言ってしまおう！
「竿を動かすな」…　これだけ♡
里ちんが予告した驚愕の新事実とは、実はたった一つの事実なのだ。
しかし、拍子抜けするのはまだまだ早い！
いつものまわりくどい江成節が、たった一つの事実にリアルに迫る！
これは「あなたの」底釣りなのだ。
読み終えたらすぐに、1月号から読み返すべし… by里ちん

佐原水郷が生んだ奇才・北城 錦登場!!
〈Vol.12〉北城 錦の底釣りゼミ⑥　～江成の復習ノート～

『もしかするとみんなが知っていて、知らなかったのは僕だけだったのかもしれない…誰も僕の底釣りを見て笑ってはいなかったが…それともみんな「大人」だから笑わなかったのか。まぁいい。少数でも僕と同じ道を辿ってしまっている人がいるとしたら、少しは役に立てるかもしれない』

今月はそんな事を書いてみたいと思います。赤っ恥は覚悟です（笑）。

※ちなみに、やっぱり恥ずかしいので事前に少しだけリサーチしておきました。僕のまわりでは驚いたことに、「知ってはいたけど大事な事だとは気付いていなかった」人も含め、理解出来ている人は一人もいませんでした。ホントです。もしかすると地元のレベルが低い？のかもしれませんが、リサーチさせていただいた人の中には超有名なトーナメンターも含まれます！これは告白する価値があると感じました。

発端は「ナジミ幅」だった。

北城氏の釣りを眺めていた僕は、「多めのズラシを力説する氏にしては随分ナジミが深いな」という印象を受けていた。

ナジみ切った直後は、3目盛残しくらいまでナジんでいた。氏のウキは使った事があり、細めのパイプトップでエサ落ちバランスは宙で6～7目盛出しというのは知っていたから、つまり3～4目盛分ナジんでいた事になる。ちなみに、小さなバラケとグルテンの釣り。この日までの「僕なりの基準」では、ズラシを多くとった場合、1～2目盛ナジミですぐにウキは返してくる。もっとも「やや振り切り」の北城氏だから、深ナジミは構わないのだろうとも思った。しかしすぐには上がって来ない。しばらくしてじわじわと上がってきたかと思うと、ズッという1目盛入る重々しいアタリでへらが乗った。次もその次も延々と同じパターンでのイレパクが続く。

氏のウキのナジみ具合、戻り方を「僕なりの基準」から逆算すると、トントンもしくはあまりズラしていないという事になる。しかし僕はトントンではアタリが消えてしまったため、気分転換を兼ねての見学だった。「北城さんの方がへらが濃いのか？」そんな事を思いながらの質問。

「ズラしてます？」

「10㎝くらいズラしているよ」

訳が分からなくなった。

「隣の人にタナ設定を尋ねる時は、タナの測り方も聞かなくちゃダメなんだよ」という氏の言葉が頭をよぎる。しかし氏のタナ取り方法は知っていた。フロートは使わない。「深く誤測することの方が多いはずだよ」…その通りだ。つまり氏の言う10㎝ズラシは、それ以上ズレている可能性はあってもそれ以下ということはあり得ない。「根本的に何かが違う」可能性に気付いてしまった瞬間だった…。

2回目のチャンス。

底釣りの魅力に取り憑かれてからというもの、それまで大好きだったカッツケには目もくれずに毎日毎日底釣りばかりしていた。それでも「底釣りの本質」に迫ることが出来なかったとは、間抜けな話だ。しかし数年前にも一度だけ、気付くチャンスがあった。

いつものように底釣りでゲキカラをくらっていた僕は（今となっては、底釣りでのゲキカラは、そうはありえないと笑えるが）、桟橋の端で快調に絞り続ける釣り人を見つけた。もちろん底釣りで。竿捌きやその釣り道具から、初心者らしい事は一目で分かった。思いっきり振り切って、思いっきり深ナジミ。それでも、少し戻してツン。これでイレパク。

自分が釣れていない時でも、初心者風の人だけが釣れているという場面には、実はそれまでにも何度も遭遇していた。いつも「ビギナーズラック」で片付け、あまり気にとめてこなかったが、この日はじっくり見学する気になっていた。なぜならその釣り人は女性であり、しかもとんでもない美人だったからだ（笑）。あまりジロジロ見るのもどうかと思ったが、それでも20分くらいは見ていただろうか。にも関わらず、僕の結論はこうだった。「…ヘチだな」。

つまり僕は、この時以来数年ぶりに訪れたチャンスを、幸運にもモノに出来たという事になる。

見落とされた「もうひとつのテンション」。

ウキには、アタリを読むという機能以外にも重要な機能がある。それは、狙ったポイント（水深、位置）へ仕掛けを届けるという機能だ。

何も特別なテクニックを用いなくても、仕掛けはウキの下に来る事になっている。ウキとオモリは互いに引かれ合い、折り合いのついた所で止まる。すなわちそこで、ウキが立つ。

例えば竿天上の釣りでの振り込み。ウキが立つ位置よりかなり沖目にエサとオモリを着水させたとしたら、ウキはオモリのある沖に引かれていくが、どこまでも沖へ行ってしまう訳ではない。「穂先」が止めるからだ。「ウキとオモリとの折り合い」は、「穂先」という助っ人の登場でウキ側優位でつく事になる。このケースで底釣りならば、「底とエサとの摩擦」というアンカーがあるために、オモリはウキの真下には来ない。ナジみ切った直後はウキとオモリとの間は斜めになったままだ。ウキも穂先で引っ張られてしまっている。僕が所有するあるハイテクニック本には、こう書いてある。「振り込んですぐに竿を手前に引いておき、ナジみ切ったら竿を送ってやる事で、ウキとオモリの間の道糸は垂直に近くなる。これで余分なシモリを取ることが出来、スムーズな戻りを助けることが出来る」と。一般的な入門書には載っていないテクニックだが、研究熱心な釣り人なら「底釣りのテクニック」として言葉で認識していなくても、無意識に実行していることだろう。なぜならここ数年宙釣りで注目されているテクニック、「ノーテンション」と同じ理屈だからだ。僕は最近まで、早い段階で戻りを出させる「速攻の完全底釣り」において必要不可欠なテクニックだと認識していた。

穂先でウキを引っ張りやすい竿天上の深宙釣りでは、はるか昔から行われていたテクニックだが、ここで宙釣りでの「ノーテンション」の効果をおさらいしてみたい。

ナジみ切っている時に実行すれば、余分なテンションが取れ、ウキから下だけのより純粋なバランス状態へ近付けることが出来るため、アタリが表れやすい。持つか持たないかというギリギリのエサをより持たせたり、軽いエサのナジミ幅を正確に知る事も出来るだろう。ナジみ込んでいく途中で実行すれば、オモリの落下を助ける事になるから、ナジませやすくなる。ウキと穂先が「ノーテンション」になることで、ウキから下は逆にきちんとテンションが掛かる事になるわけだ。ここで、オモリから下のハリスまでがキチンとナジむかどうかは別問題。しかし、ウケがきつくエサがオモリよりはるか上で止められているような状況では、オモリの位置が下がる事で上方向にハリスが張り、トメや戻しといったアタリをはっきり読み取れる可能性も出てくる。

※「送りサソイ」という言葉があるように、「ノーテンション」には「サソイ」になるという側面もありますが、「サソイ」は非常に難しいテーマであるため、ここでは深く触れません。「サソイ」には様々な種類がありますが、それぞれのアクションによってどのようにラインのテンションが変化するのか・動くのか、さらにその結果どうなるのかも、人によって様々な考えがあるのです。また「サソイ」そのものを否定する人さえいます。ここで一つだけ注意して頂くとすれば、「送りサソイ」と「ノーテンション」は同義語ではないという事でしょうか。あくまでも「送りサソイ」は「ノーテンション」の一側面です。

「ノーテンション」の究極は、竿掛けに竿を置かずに穂先でウキを追うスタイルだ。入門書を読んだだけのビギナーでは気付き得ないそのスタイルを、内心「上級者の証」と捉えている人もいるかもしれない。（正直言って、僕はそうだった。今回、北城氏の釣りを見て「発見」出来た理由がコレなのだ。失礼になるが、振り込んで竿を置き、合わせる迄の間の氏に、上級者らしからぬものを感じてしまった。理由はすぐに分かった。「何もしていなかった」のだ。のんびりとアタリを待つ初心者のように。この瞬間、全ての疑問が一斉に解けてゆく興奮が体中を駆け巡った。と同時に、「不必要な時」にも竿を送ってしまっていた僕は結局、ポーズだけ真似てみるだけの「なんちゃって上級者」だったという事も思い知らされたのだ…）

宙釣りで得られる「ノーテンション」のメリットのほぼ全てが、底釣りでも得られると考えていいだろう。底釣りではエサが底についているために、「軽いエサのナジミ幅を正確に知る事が出来る」というメリットについては疑問だが、その代わりに「スムーズな戻りを助ける」という宙釣りにはないメリットが発生する事となる。しかし…、デメリットも発生してしまうのだ。

底釣りで「竿を送るという動作」が、余分なシモリを取り、スムーズな戻りを助けるのは事実だ。間違ってはいない。しかし、故意にテンションを緩めてはならないケースがある。ズラシを多くとった場合に、送る量によってはアタリが出ないのだ。なぜならアタリを伝えるために「必要な」オモリから下の、つまりハリスのテンションまで取ってしまう危険性があるからだ。ズラシが大きい状態は、もともとハリスのテンションが「ゆるやかな」状態なわけだから、一段とたるんでしまえばアタリが伝わらないのは理解してもらえるだろう。スムーズ過ぎてはマズいのだ。

ズラシを調整するという行為により、オモリから下だけの角度にばかり気をとられ、仕掛けは全てつながっているという意識が薄れてしまう人も多いと思う。ここで「仕掛け全体の角度の変化でウキはナジみもし、戻りもするというふうに意識しておいて欲しい」という北城氏の言葉が重要になってくる。

実はこの言葉を聞いた後でも、僕は竿を送る事を止めていなかった。氏の話とは矛盾しないと感じていたからだ。「竿を送る事でウキからオモリまでの道糸の角度が変わった場合（垂直）、ハリスはより自然な状態になる」と考えていた。これも間違ってはいない。しかし、「自然な状態」が「アタリが伝わる状態」だとは限らない事に気が付いた。「ズラシ過ぎ」と同じ事になってしまうと気付いたのだ。実はこの事も、氏からさんざん聞いていた筈だったが、僕はここではじめて氏の言う「仕掛け全体の角度」を、完全に理解出来た事になる。

底釣りの本質は、「仕掛け全体のテンション（角度）をコントロールする」事にあったのだ。「仕掛け全体の角度」には、「穂先からウキまでのテンションも当然関係してくるという事の見落とし」は、同時に「ハリスに必要なテンションをも見落とし」ている事になる訳だから、実は「二つのテンションの見落とし」だった。

この見落としは、きっと僕だけではないはずだ。底釣りゼミ②の図2を見て欲しい。穂先が描かれていない事に気付く。当時この図を描いた（もしくは描かせた）人も、穂先からウキまでのテンションをあまり意識していなかったのではないだろうか。ただ単に省略されているだけであり、僕の思い過ごしだと感じる人もいるかもしれない。もう一度よく見て欲しい。一部描かれているウキの上の線（糸）だけ、フリーハンドなのだ。

気付けない理由。

竿を送ることの副作用に、僕は長い間気付けなかった。北城氏との取材がなかったら、もっともっと時間がかかっていた事だろう。

確かに教科書に「竿を送るな」とは載っていなかったが、何かを「しなくてはならない」という話ではないから、載っていなくても文句は言えないのかもしれない。厳密には「何もしてはいけない」のと「何もしなくていい（何をしてもいいともとれる）」のとは違うので、僕にとってはホントは書いておいてくれた方が親切だった。しかし底釣りの基礎が確立されたはるか昔には、「竿を送る」という行為自体がなかったのかもしれない。教科書のせいではないとすれば、あまりにも時間がかかってしまった理由はいったい何処にあるのか。自分の頭の悪さは棚に上げて考えてみた。すると、底釣りの理

解を困難にする、幾重もの罠があることが見えてきた…。

底釣りは、組み立てる要素の多い、極めてデリケートな釣りだ。端で見ている者にとってその内容を詳しく知る事は難しい。釣っている本人にしか分からない要素が多過ぎるのだ。仮に疑問に感じる事があったとしても「お互いの基準の誤差」に吸収されてしまうため、なかなか自分の殻から抜け出せない。これが底釣りの理解を妨げる第一の罠。

そこを一歩踏み込んで、突き詰めて話をしたとしよう。ズラシ幅を聞く前に、タナ取り方法、エサとハリの重さ、トップの太さ、振り込み方法もチェックしたとする。これでその人の基準の水深とアンカーの度合い、実際にウキに現れるナジミ幅が、ほぼ想像出来るはずだ。これらの項目を全てチェック出来る釣り人は、それなりの経験を積み、ある程度底釣りに自信を持っていることだろう。しかし「待ち方」によって、ナジミ幅もウキの上がり方も変わってしまうという認識がなければ、チェックした全ての前提が意味のないものになってしまう。ウキの動きで明らかにそれと分かる「サソイ」であれば注意が行くのだが、そうでなければ手元まで気にかけるのは難しい。この認識がどちらかにあったとしても、問題に気付きにくいのだ。これが第二の罠。（北城氏と僕のケースがこれにあたるが、今回は気付く事が出来た。結果として「上手な人と並んで釣りをする事が、上達への近道」ということを証明してしまったように見えるが、今回は「偶然」も大きかった）

自分の基準で他人を「診断」した結果、理解不能な状態であったらどうするか。相手のことを「ちゃんとタナが取れていないのでは？」と感じてしまい、その先を考えることを放棄してしまう釣り人が多いのではないだろうか。傲慢と言えなくもないが、そのくらい自信を持って臨まないと釣れないのが、また底釣りなのだ。

昔から「自信を持って底釣りを組み立てる上で一番重要なのは、底立て（タナ取り）」とさんざん言われてきている。「底釣りは底立てが全て」と言う人さえいる。全てを「タナ取り」のせいにしてしまうのも無理はないのかもしれない。しかし、これが第三の罠。僕もこの格言は間違いではないと思う。出発点をキチンと明確にしておく事で、その後の組み立てに迷いがなくなるからだ。しかし…「タナ取り」がどんなに重要だったとしても、底釣りを組み立てる「材料」にしか過ぎない。この格言は、「底釣りの本質」を言い表したものではないのだ。

事実、僕が面識のある数少ない底釣り名人達ほとんどの「タナ取り」は、かなりアバウトだ。中でも「あまり時間をかけても（丁寧に測りすぎても）ムダ」と言う名人が意外と多い。水位が変わる可能性があるし、底が掘れる可能性もある。

もちろんベテランになればなる程、短時間で手早く正確なタナ取りを済ませられる訳だから、「アバウト」では語弊があるかもしれない。初心者と大きく違う点は、ウキから読み取れる情報量の多さだ。北城氏とではないが、はるか以前にある名人とこんな会話をしている。

江：「ちゃんと測っておけば、深ナジミで底が掘れたかどうかすぐ分かりますよね？」

名：「ズラシが多いときは、そんなにナジミは変わらないよ。そういう時はどこで判断するの？」

江：「え？　あの…」

名：「そんな事もわからないんじゃ、測り直した方が早いよ」

江：「じゃあ、○○さんはわかるんですか？」

名：「そりゃウキの動きを見て色々と想像はつくよ。でも迷ったら何回でも測るよ」

江：「結局測り直すんじゃないですか。それなら最初からキチンとしておいた方が得では？」

名：「うーん。最初のタナ取りを信用して1日続ける方がよっぽどアバウトだと思うんだけどねぇ…」

江：「……」

第四の罠も、タナ取り至上主義のこの格言に隠されている。全ての基準とすべく、キチンと丁寧に時間をかけて「完璧に測れた（つもりの）タナ」は、タナを取った時と同じ状態で釣ることを、釣り人に無意識に植え付けてしまう。詳しくは次項に送ろう。

最後の罠は、「ズラシ」という用語が持つ語感だ。「這わせ」や「ベタ」よりはマシだが、アタリが出にくくて当然というイメージがある。「ズラしたってハリスは寝ない」という事実が広く認識されるようになり、どうやらアタリが出ない事はなさそうだと感じはじめても、今度は「へらが食いやすい」というそのメリットが、必要以上に弛ませる事を疑問に思わせない。無意識の「ノーテンション」を誘ってしまうのだ。

ズラしたハリスにわざわざテンションを掛けるなど、僕は思い付きもしなかった。むしろ、「ズラシとは弛ませる事」だと思っていたフシがある。だから無意識ではなかったのかしれない…。

「完璧な落とし込み」の呪縛。

底釣りといっても、ポイントで言えば遠浅やカケアガリの浅場から超長竿が必要な深場まで、ウキの位置で言えば竿天上からカッツケに近い位置まで様々だ。中でも釣り人に人気があるのは、水深に関わらず竿天上の底釣りだ。不可能な釣り場以外では特別な理由がない限り、竿天上で底が取れる竿を選ぶ釣り人が多いものだ。振り込みがしやすい、ウキが近くて見やすいという理由が主だろう。振り込みがしやすい事から派生するメリットには、「タナ取りがしやすい＝正確（垂直）に測れる」というものがある。僕の場合は、その「正確に測れたタナ」を「限り無く完璧に近い落とし込みが可能になる」事で「完全にトレース出来る」という認識だった。

「限り無く完璧に近い落とし込み」は、仕掛けの中途半端な位置にウキが付いている底釣りであっても、竿振りに自信があれば可能だろう。しかし、竿天上の底釣りの方がよりコントローラブルだ。「竿を送る」ことだけなら、どんな底釣りでも可能だが、「直接ウキを持ち上げる」ことは出来ない。管理釣り場の平坦な深場で底釣りをするのであれば、竿天上ならわざと「手前に落とし込む」という事もしやすい。そこまでして僕が目指したものは何だったのか。それは「穂先からウキまでの究極のノーテンション」だった。そうする事で「タナ取り」で得られた情報を完全に活かし切る事が出来ると考えたのだ。

道糸の重さがウキに与える影響を考慮しても、竿天上になる竿を選択するのは自然な事だった。「ウキから穂先までが長ければ長い程、ウキに与える影響は大きくなる」。僕が子供の頃に買ってもらった古い入門書には載っていないが、最近の初心者向けの記事には高い確率で載っている文章だ。実は僕はへら釣りを一時中断しており、再開する際にへら雑誌を読み漁った。古本屋で探した自分の子供の頃のものから最新のものまで、膨大な量を読んだ。その時に僕も、この文章のお世話になっている。「入門書のレベルは確実に上がっているな」と、ブランコ付きのウキを握りしめながら感動したものだった。残念ながらこの時に決まった僕の方向性は、底釣りの本質とはかけ離れていく事となる。「仕掛け全体の角度」という言葉を聞いても、無意識に「穂先からウキまでのテンション」を除外してしまう程に…。

確信。

ゴールデンクラブ時代にさんざんやったカッツケ釣りで僕が感じた事は、へらの吐き出しの速さは想像以上という事だった。そのために速いアワセが必要になるのだが、僕にはソフトで速いアワセがどうしても出来なかった。勢いで跳ね上がった穂先を止める動作が、どうしても水面を叩いてしまう事になる。これは言うまでもなくマナー違反だし、へらが驚いて一気に走り出すためにライントラブルも多いなど、いい事は何もない。二段アワセを克服し、ソフトで速いアワセを修得する事が、これからも僕の練

習課題である。しかし、「食って走らなければ、アタリなんか出ない」という意見がある。つまり「釣れる時はゆっくりアワせても乗る」というものだ。この事から「どんなに早くアワせたところでカラはカラでしかない」とまで導いてしまう人がいる。そうなってくると、カラツンを解明する上での全ての前提が崩れてしまうから、あまり気にしないようにしてきた。それに、僕達の極端に短いハリスというスタイルは、食いっ走りだけでなく全ての動きを捕える事が出来ると信じていた。その短さゆえに一段と吐き出しスピードが速まるという心配よりも、食う前のサワリを全て読み切りたいという気持ちが優先されたのだ。

ところがある底釣りの水中ビデオを見た僕は、この意見があながちウソではないのではないかと感じてしまう。「常識的な」長さ以上のハリスで釣りをする場合、食った瞬間を捕えているという意識やカラツンから得られたと思っていた情報は全て幻だったのか…その時は相当ショックだった。やがて僕は、この意見は底釣りでのみ通用するのだという結論に達する。だいたい底釣りのビデオだし（笑）、現代のへら釣りを解くための重要なカギである「ハリスの張り」を、そう簡単に否定する訳にはいかなかったのだ。宙釣りなら、へらに揉まれている状態は別として、ナジみ切っていればハリスは必ず張る。しかし底釣りではズラシを多くとった場合、ハリスは弛みアタリが出ないと考えた。以前の僕の底釣りなら、これは事実だったろう。完璧に測れたタナ（垂直）を「トレース出来る振り込み」＋極端な「竿送り（ノーテンション）」＋多めの「ズラシ」＝ハリスは大きく「弛む」＝「アタリが出ない」…。

もちろん僕が見た水中ビデオで「ハリスは寝ない」事は学んだが、ゆるやかに張っているようには見えなかったし、見ようともしなかった。ズラした底釣りにおいても「ハリスの張り」が重要なのだという意識が全くなかったからだ。力学的に見れば、アタリを伝えるためには宙・底問わず「ハリスの張り」が重要なのは当然なのに、ビデオの中の「アタリって出ていないものなんですね」という解説者のセリフに「そうなのか～」としか思わなかったのだ。（先日あらためてこのビデオを見たら、へらに蹴飛ばされて弛みが大きい状態での食いっ走りだったと確認した）

「底釣りでは食いっ走りのアタリしか出ていないのかもしれない」との思いは、底釣りをやればやる程強くなっていった。僕の強いアワセでも、へらが走らないケースが多かったためだ。乗った感触を穂先で感じるまでに、ワンテンポのズレがある事も多かった。長ハリスでフカセ気味の深宙をやるとよく感じる、居食い系のあのズレだ。バレもスレも多いのも全く同じ。大笑いなことに、このズレを「底釣り独特の感触」とまで感じてしまっていた。「食いづらい」底に向かって逆立ちをしたへらが、口に入れると同時に姿勢を立て直す。これが居食い系になる大きな理由だと、大真面目に考えていた時期さえもあったのだ。自分でアタリが出ない状態を作り出してしまっているとは気付いていない訳だから、ズラシを嫌い、「トントン派」になっていくのは、僕の中ではごく自然な流れだった。トントンであれば、底からオモリまでの距離は上ハリス分確保されている。竿を送ってもハリスが弛み切る心配がない。かなりテンションの強い状態だから、積極的に送っても構わなかったのだ。

北城氏の釣りを見て過ちに気付いた後、僕は一気に7㎝程ズラして沖打ちし、「竿を送らずに」待ってみた。その1投目。深いナジミに違和感を覚え、無意識に手が前に出そうになる。そこをぐっと堪えて待つ。やや上がってきてから、小さく押さえ込まれたアタリにすかさず手が出た。へらはいたのだ。たいした型ではなかったが、のされそうになった。アワセた瞬間のへらの走りに、手首が馴れていなかったのだ…。

実は全く個人的な「気付けない理由」として、「ウキの自作」があった。スレやバレ、居食い系のズレは、自作のウキのせいなのかもしれないという不安もあったのだ。どこがどう悪いのか分からないが、とにかく感度が鈍いのではないか?と。しかし宙で使う分には特に不具合はなかった。底には底用のウキが必要なのか? そんな筈はない。それは宣伝文句ではないのか? 確かに底釣りに特化したウキは存在し、使いやすいのは事実だろうが…。

今回、そんな心配は無用だった事が分かり、ちょっと嬉しかった（笑）。

最新テクニックの功罪。

あるテクニックが初めてメディアに紹介される時、断片的な情報しか載らないケースが多い。そのテクニックが「目立った」ために紹介される事になるわけだから、「釣果が上がる」という良い面だけがクローズアップされてしまうのは仕方がない事なのかもしれない。しかし物事には全て、表と裏がある。メリットだけでなくデメリットもある筈なのだ。全く新しく開発されたテクニックの場合なら、その先駆者でさえも検証を終えていない可能性はあるが、一部の上級者の間で古くから知られながらもたまたまメディアに載っていなかったというテクニックであれば、併せてデメリットも紹介すべきだろう。

例えば「落とし込み」。効果的なウワズリ対策として、釣り人のレベルを問わず「振り込みの新スタンダード」と呼べる程、爆発的に広まった。特に浅ダナでのウキをかぶせる振り込みは、初心者には難しかったが、それだけにたまらなくカッコよく映った。みんな練習したと思う。

ところが問題もあった。一点に集中してエサ打ちを続ければ、「振り切り」と同じようにへらは上層に寄ってしまう。このデメリットは当初、置き去りにされた。「打ち分け」という言葉がメジャーになるまでに、数年のタイムラグがあった筈である。

言われてみればコロンブスの卵というケースは多々ある。しかし、自分の頭で考える事を困難にさせてしまう程にメディアの影響は大きいのだ。

「分からない」のと「知らない」のとは違う。解決は本人次第になるが、問題に気付けている分だけ「分からない」人は幸せなのだ。

僕を含む多くの凡人は、教科書を疑う事を知らない。

初心者が釣れる秘密。

あくまでも僕の主観だが、初心者は「タナ取り」で深く誤測する可能性が高い。竿振りが未熟なために、釣る位置よりも沖めで測ってしまうからだ。竿天上であっても、垂直に測る事は難しいようだ。納得するまで何回かシャクってみて決めるわけだが、ある初心者にこう聞かれた事がある。「何回かって、実際何回なんですか?」。驚いたが、僕もそうだったのかもしれない。「納得するまで」の「納得」が、もうすでに初心者には理解できないのだ。このへんのノウハウは、入門書をよく読めば載っている筈だとは思ったが…。

この事から、実は初心者の底釣りは、最初から大きくズレている可能性があると言える。しかし竿振りが未熟なための沖打ちは、大きくズレたハリスにアタリを伝えるためのテンションを与える。北城氏の言葉を借りれば「ズラしてアタリが出ない事はない」から逆に、ズラさないとアタリが出ない状態だったとしても、偶然に乗り越えられている事になる。しかも初心者は、何も知らないために「余計な」事はしないのだ。

まるっきり初心者の頃の僕の底釣りに対するイメージは、一般的に言われているのと同じく「宙より簡単」だった。もちろん僕が他人より釣れるというレベルの話ではなく、同じエサで釣れ続く時間の長さやアタリの取りやすさ、いつでも楽しめる安定性などの話。ところが勉強すればする程、そのイメージは「難しい」へと変わっていった。「底釣りは急速に難しくなってきているのだ」と錯覚してしまっていた…。

初心者の時には簡単な底釣りが、釣りを覚えるに従って難しくなるというのはおかしな話だ。「引き出しが増えたための迷い」という話なら分かるが、僕達がそこまで言えるレベルではない事は、自分達が一番知っていた。しかし、宙釣りから磨いてしまった僕の仲間の中で、底釣りが得意という者は誰もいなかったために、「底釣りの難易度の急上昇」という結論を出さざるを得なかった。当時の僕達の浅ダナでの釣果は、結果として底釣りでの貧果を目立たせる事になった。生意気にも芽生えたプライドが、結論を急がせたのかもしれない。

振り返ってみると、僕にとって全てを掌握出来る筈の竿天上の釣りの時よりも、長竿で一本半とか三本とかの中途半端な水深の底釣りの時の方が、良い結果を残せている。時季的な要因や狙った魚の活性のせいだと思っていたが、ここへ来てやっと分かった。何の事はない、自分も初心者と同じ事をしていただけだったのだ。

沖打ちと深い誤測。落とし込めていない事によるテンションが効いていたのだ。いくらか送ったところで、そうそうテンションを取り切れるものではない。

悲しい僕の底釣り史の原点は、本質を学ばないまま、ビギナーを卒業してしまった事にある。いや、確かに知識は増えたが、卒業出来てはいなかったのだ。

そして転向…。

98年、「へら専科」で僕はこんな事を言っている。「カラツンが多いのは承知の上で、アタリがはっきりと出るトントンから切り気味を基準としたい。カラツンに対しては、ズラすのではなく、ハリスの細さに求めるようにする」。

一般的に言われるズラシの効果は、イメージとしては知っていた。しかし、それまでの竿を送ってしまう僕の底釣りでは、大きくズラせばアタリが出ない。カラツン対策どころか全ての動きが消えてしまう事になる。出るとすればスレアタリだけだ。だから「あり得ない」事だったのだ。それとも大きくズラす事で、食いっ走るへらが現れるとでも言うのなら、アタリが出るのも分からない事もない…そんな風に思っていた。細いハリスに頼るのも、トントンにこだわるなら理解出来る。

食い渋ったへらと、へらにとって抵抗の大きいタナ設定との折り合いをどこで付けるのか。これが僕の底釣りでのメインテーマだった。「積極的なズラシ」を多用する釣り人と並んで負けても、全くメゲなかった。大差で負けた事はなかったからだ。おかげで（笑）「まだまだ接点はある」と、誤った道をさらに突き進むことになる。今思えば、それまでに僕が出会った大半の「積極的なズラシ派」な人達も、道の途中だったのかもしれない…。確実に存在し、僕の底釣りともっとも矛盾する問題である「ズラさなければ食いアタリが出ない状態」については、イレギュラーでしかないと吹っ切った。

ズラしていく方向を完全に否定した僕にとって、あまり選択肢は残されていなかった。ハリスの次はもう、アタリ取りのタイミング変更とエサしかない。何をやってもカラツンになるケースでは、「落ち込み」に自然落下という側面を見い出した。抵抗を減らす要素になると考えたのだ。エサもアマく手直しする。ウキのサイズを落とす方向を探った時期もあった。しかし食い渋ったへらが、そうそうこちらの思い通りに動いてくれる筈はない。ウワズらせてパンク。そんな時の僕の言い訳がこうだ。「へらが底に付いてない」…ただのバカだ。僕にとって、底釣りでのエサはよく言われる「幅の広い」ものではなかったし、底釣りは「カラツンが少ない釣り」でもなかった。「限界」という言葉も頭に浮かんだが、自分の技量不足の言い訳でしかないと戒めた。底釣りの本質を理解出来ていなかった当時の僕に、この判断は酷だった。

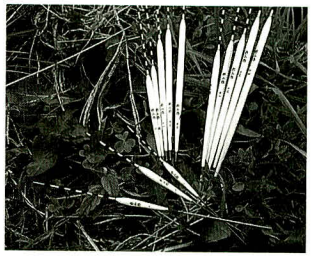
「トントンから切り気味」とは言っても、僕が全くズラさなかった訳ではない。トントンはアンカーが強いというのはもちろん知っていたから、重いエサを使う時や流れのある時に、いくらかはズラした。もう少し言えば、「完璧を意識した落とし込み」と「竿送り」では足りない時にだけ、少しずつズラシを加えていった。どういう時が「足りない」のか。エサ落ち近辺まで早い段階で戻らない時だ。「エサ落ちまで戻してからのアタリを取ろう」という入門書の教えを忠実に守っていた訳ではないが、エサの大きさ（エサ全体の残り具合）や開き具合（芯の大きさ）だけでは説明がつかないヒット率向上のキモだという事は、北城氏のように理論的な理解はなかったものの、経験から学んで知っていた。「トントン派」とはいっても、僕はナジミが深いままで釣っていた訳ではないのだ。

「少しずつ」というのは正しかった。ズラし過ぎてしまえば、アタリの伝達に必要なテンションが失われてしまうからだ。「戻し切ってからアタリが出るまでに、時間があき過ぎるのは良くない」とよく言われる。「戻り」を「サワリ」と捉えれば「へらのやる気のバロメーターだから」という事になるが、アタリの伝達という面から言えば「必要なテンションが架かっているかどうかの確認が出来ないから」なのだ。故意に送って戻した場合も全く同じ。ここで竿を手前に少し引いてやれば、必要なテンションをかけ直す事が出来る（引いたら竿を戻さずに、止めておく）。これは「サソイ」ではない。当時ここまでは分かっていながら、「仕掛け全体のテンション（角度）をコントロールする」という底釣りの本質には辿りつけなかった。「振り込み」と「待ち方」を変える事で、大きなズラシにもテンションを与えられる事に気が付かなかった。ハリスに「しっかり」とテンションを掛けつつも、早いタイミングでエサ落ち近辺までスムーズに戻させるためには、「大きく」ズラさなければならないという事に気付けなかったのだ。

「大きなズラシにもテンションを与えられる」では語弊がある。大きくズラす時はテンションを「与えなければならない」のだ。こだわって「落とし込み」を選択していたつもりだったが、僕はやはり無意識だけだったのかもしれない…。角度についての探究（＝ズラシ）を放棄した僕の前に、道がある筈がなかった。

競技派からのんびり派まで、すべての釣り人に使って欲しい…

へら浮子 杉山作



浅ダナスタイル
【パートⅠ・パートⅡ・ワイド・ムク】
（各1本4,500円）
フリースタイル
深宙スタイル
（各1本5,000円）

取り扱い店〈五十音順〉
埼玉・越谷 かわせみ（☎048・969・5067）　茨城・下妻 こやの釣具（☎0296・44・1619）　東京・渋谷 サンスイ川釣り館（☎03・3499・5025）
埼玉・入間 三水堂つり具店（☎042・964・2093）　栃木・益子 フィッシングハウスほその（☎0285・72・2215）　神奈川・川崎 鮒仙人（☎044・287・7470）
東京・吉祥寺 丸勝（☎0422・22・8923）　東京・青梅 吉川釣具店（☎0428・22・2467）

残された課題。

角度についての探究を再開したばかりの僕にとっては、「ズラシの効果」とは「しっかりテンションを掛けても、キチンと戻し切らせるため」だけでも十分に満足出来る。しかしこれでは、「ズラさなければ食いアタリが出ない状態」の説明にはならない。「アタリの伝達」とは別次元の問題なのだ。だから次のステップは、「へらの都合」から見た場合の「ズラシの効果」をきちんと説明し、それを実感するという事になってくる。そうする事で、トントン派の時には考えたことさえなかった「ズラさなければ食いアタリが出ない状態」も完全に理解し、実感する事が出来るだろう。これは僕の、「ビギナーからの卒業試験」になる筈だ…。

ズラシの効果として、一般的に「エサの安定」が言われているが、沖打ちによってテンションをかけた状態で釣る場合でも、果たして本当にそうなのか？　もしかするとこれは、「ズラシ」の語感が僕にそう感じさせるだけかもしれない…。また「抵抗が小さい」とも言われるが、ハリスにはやはり沖打ちによるテンションが掛かっている。故意に弛ませて釣るわけではない。トントンで竿を送った場合と、大きくズラして沖打ちした場合とでは、テンションの大きさに大きな違いはないように感じる。アタリを伝える能力には差がないのでは？という事だ。

では一体何が違うのか。僕にとって、一般的なこの二つの理由には、言葉が足りないような気がする…。もう少し突っ込んだ解答が欲しいところだ。しかし、これは自分の頭で考える事としよう。

「底釣り上級者への扉は、おそらく目前にある」。そう確信しつつあったある日、某管理釣り場へ出掛けた。

14尺いっぱいの底釣り。夏冬メインのグルダンゴで、ウキはすぐに動いた。タナはとりあえずトントン。しかし全然乗ってこない。今思えばここでズラせば良かったのだが、ウキを見ると熱くなる僕にそんな余裕はなく、いつもの釣りで対応していった。

まずエサからいじった。重さがネックだと感じた僕は、夏を減らし冬多めのブレンドに変更した。が、結果は変わらなかった。ハリ切れの悪さから、むしろウワズリがきつくなったようにも思えた。軽くしたとはいえ、時季的にグルダンゴではさすがに食い込めないか？と感じた僕は、バラケとグルテンのセットに変更。しかし、どうもグルテンへの興味が薄いようで、たまに釣れても上バリを食ってくる。グルダンゴとセットを行ったり来たり…。隣では段底で決まりが出始めている。「へらの位置が高いのかもしれない」。またしても大バカが頭をもたげてきた。グルダンゴをアマく手直しし、落ち込みを狙いにいくが撃沈。アタリもとんでしまう。エサ打ちを続けるうち、ウワズリ切っていたへら達は再び寄って来てくれたが、ハリスやハリの号数を落としても、全くお手上げ状態のまま時間だけが経過していった。そうこうしているうちに、ついにウキの動きは完全に止まってしまった。しばらく締まったエサを打ち続けたが、たまに気配はあるもののアタリを出してはくれない。隣の段底もボヤいている。ウワズリではなく、とうとう「食い気のあるへらがいなくなった」と思った。

いつもの僕ならここで終わりだが、この日はテーマがある事を思い出した。一気に8～9センチ程ズラして、さっそく実践。実はこの時、沖打ちを忘れ、さらに無意識に竿を送ってしまっていた。何の効果も感じられないまま3投程打ち終え、ハッと我にかえった後の第1投目。へらは「いた」のだ。たまたまではない事は、この後延々と続くイレパクによって証明される事になる。しかも、それまで釣れていなかったような型モノまで混じり出した。ズラシの程度によって、へらからの選別を受けている事は明らかだった。

僕は今まで、へらに食い気が全くないとしても、エサのまわりにいれば気配を感じる事は出来ると考えてきた。その気配が数投に一度だったり、気のせいと感じる程に微弱だったりで見逃す可能性はあるとしても。今回のケースでも「居る」感じはしていた。しかし、カラツンと呼べるような動きが全くなかったために、食い気がないと判断したのだ。ところがどうだ。ズラシを取った直後からアタリっきりとなり、しかもカラツンもほとんどない状態になってしまうとは！

このデータから、「ズラさなければ食いアタリが出ない状態」には、「ズラさなければカラツンさえも出ない状態」も存在する事が分かった。ズラシが全く合っていない状態では、「カラツンから食いアタリへ繋げていく」という、へら釣りならではのプロセスのスタート地点にも立てない可能性があるのだ。今回はたまたますぐにイレパクになってしまったが、トントンと9センチの間をとって4.5センチくらい（笑）のズラシでスタートすれば、とりあえずカラツンから始まったのかもしれない。

それにしても…、取材の横利根でも感じていた事だったが、「ズラさなければ食いアタリが出ない状態」に、「イレパクになる状態」もあるという事はショックだった。そんな状態では、どうせ大した釣果は得られないと考えてきた。だから僕は「イレギュラー」で片付けて来たのだが、こんな僕をさらに驚かせる、もう一つの面白いデータが今回はとれた。実はイレパクが始まってから最初の1時間程は、エサ落ちまで戻し切るはるか手前のアタリで釣れ続いていたのだ。（もちろん「落ち込み」という訳ではない）調子に乗ってアワセ続ける僕も僕だが（笑）、これは一般的に「活性が高い」と判断される状態ではなかったか…。であれば、活性が高い（食い気がある）状態であっても、「ズラさなければカラツンさえも出ない」ケースが存在するという事なのだ。

「ズラシ」、恐るべし…。

また、見事に食って来るグルダンゴにそれまで抱いていた「食い切れない」との印象は、全くの錯覚だった事になる。ここで「合っていないタナでエサをいじる事は無意味」なのだと痛感した。「エサよりタナ」という格言の真意を、やっと理解する事が出来たのだ。「底釣りは底立てが全て」という格言とは別のものだった…。

風の出た午後、面倒臭くなった僕は、思い切り「振り切って」いたが、イレパクは変わらなかった。変えたのは、アタリを取るタイミング。風で乾いてしまったエサのせいか、カラツンが目立ち始めたので、アタリを1回送る事にしただけ。結果的にもう1目盛戻してからのアタリを取る事になったから、ウキの抵抗も関係あるかもしれないし、リズムが若干スローになる事でウワズリ対策になっていたのかもしれない。いずれにしても、底釣りでのエサの幅は、やはり「広かった」ようだ（笑）。

僕の「振り切り」を見ていた仲間がこう言った。「まるでドボンだ」と。なるほど、そうか。同じズラシ幅での比較なら、ウキからオモリまでが垂直よりも仕掛け全体が斜になる方が「くの字」も小さいかもしれない…。頭の隅に置いておこう。

僕の話を真剣な顔で聞いた後、その仲間はさらにこう言った。「まさにドボンだ」と。そう、テンションの大きさに差こそあれ、ドボンと一緒。ドボンと同じだから、穂先で引っ張ってアタリが出ない事もない筈だった。「食い上げ」もハッキリと読めた…。

つまり底釣りは、バランス・ドボン問わず「仕掛け全体のテンション（角度）をコントロールする」釣りという事になる。だからドボンをバカにしている釣り人は、実は底釣りの本質を理解出来ていない可能性があるのだ。この「可能性」は、原稿を書くにあたり、計り知れないエネルギーになった。

ところで「へらの立場から見たズラシの効果」と「トントンで竿を送った状態と、大きくズラシして振り切った状態との違い」だが、現在のところ、自信を持って言える答えは出せないでいる。でも構わない事にしよう（笑）。実感だけは十分に出来た事だし…。しかし一つだけ確かな事がある。それはハリスが作る「角度」の差。あたりまえだ（笑）。…ここから先は、僕の現段階での想像だ。

「大きくズラシした状態」は、オモリから下の水深に対してハリス長に余裕がある事になるから、底から離れてしまったり、へらがサワる前から動きやすい状態になってしまったりする心配がない。「振り切った」場合でも、ハリスのテンションが取れていくにつれてオモリ方向に引っ張られてはいくが、それでもへらには拾いやすいという事になるのだろう。これが「安定」ということだ。何だ、結局教科書通りか（笑）。「抵抗が小さい」に関しては、ズラシを多くして戻し切った直後のウキの状態の話であり、ハリスのテンションの話ではない。だから「振り切り」であっても通用する理由なのだ。あ、これは北城理論だった（笑）。もう少し言えば、厳密にはハリスのテンションも戻していくにつれ、当然小さくなってはいくのだが、必要なテンションは「しっかり」と残るのだ。ハリスにだけ注意を奪われると、ハリスのテンションをキープしつつ戻させるという認識が薄れてしまうので、それを回避するための言い回しなのだと理解してもらっても構わないのだろうと思う。ここを誤解すると、僕と同じ道を歩む事が出来る（笑）。

もう一つ理由があるとすれば、やはり「ハリスへの警戒心の緩和」かもしれない。北城氏も言っていたが、へらが逆立ちした時の、ハリスに触れる確率の問題だ。「角度」という言葉から連想すれば、実はこれが一番しっくりくるようにも感じる。ハリスに警戒するなら当然オモリにも警戒するだろうから、ズラすことでエサがオモリから離れる（水平方向）事にもなるし…。案外これがホントにキモだったりして（マジで）。

蛇足。

「ズラシを多くとった底釣りでは竿を送ってはならない」という話を延々としてきたが、「竿を全く動かしてはならない」という話ではない。北城氏も当然、微調整はする。自分のイメージ以上にアンカー（シモリ）になっている場合には「送る」し、テンションを掛け直すためには「引く」のだ。実はそれ以外でも、「ウキと穂先の間のテンションの確認」のために、常に氏の竿を持つ手（ちなみに左手：名人にはサウスポーが多い！）は小さく動いている。横利根では舟からの見学だったので気付かなかったが、もっと側で見ていたら気付いたのだろう。結果的には、舟からの見学で良かったのだ（笑）。それを「サソイ」と受け止めていたら、僕の底釣りは変われなかった。

北城氏は笑いながらこの話を聞いてくれた。そして「サソイ」に対する氏の考えを語ってくれた。

「一般にサソイと言われる、テンションに変化を付けるアクション全般に対し、へらに何らかのアピールをするために用いるという意識は、俺には全くない。もちろん反射食いは否定はしないが、期待もしていないという事だ。期待するのは、エサを開かせる効果と、アタリの伝達に必要なテンションの調整だけだ」

「サソイ」もまた深いテーマだ。いつかキチンと整理しなければ…と、考えている。

補足。

次回はいよいよ「底釣り編」の最終回となりますが、僕のホームページの掲示板への書き込みを紹介したいと思っています。記事には載らなかった、北城氏からの補足説明もあるからです。ホームページを見た方しか知らないというのではマズいですから…。

今月号を読んで、もしもう一度「ゼミ」を最初から読み返そうと思った方がいたら、登場する「江成君」のコメントに注意して読んでみて下さい。実は「ゼミ」を書きはじめた当初より、今月分のテーマは僕の頭の中にありました。でも「江成君」は、結局「ゼミ」の最後まで「底釣りの本質」には気づけないという前提で、5月号まで書いてみました。所々ちぐはぐな「江成君」ながら、それでも北城氏との会話が成立してしまうという「底釣りの難しさ」を感じて頂く事が出来たら幸いです。

いかがでしたでしょうか。

江成が言及しているとおり、もう1カ月だけ引っ張らせて頂きまして（笑）、底釣り編の最終回となる来月、これまでに寄せられた意見、質問等に対する北城氏の返答などを掲載してみたいと思います。御期待下さい！

（里）

釣番付

料金表

50名まで	55,000円
51名～75名	60,000円
76名～100名	65,000円
101名～125名	70,000円
126名～150名	75,000円
151名～175名	80,000円
176名～200名	85,000円

・仕上がりは黒一色です
・人数は成績表部分のみ数えます

書体見本

1.ぐりへら鮒会
2.ぐりへら鮒会
3.ぐりへら鮒会

・番付をインターネットで公開できます（無料）

お問い合わせご注文はお早めに！

取扱店：柴　舟　03-3613-2727

ウキや小物の銘入れに

転写シール

初回注文黒一色、300銘で8,500円～
２回目以降同じものをご注文の場合は3,500円～

・8書体、8色を御用意しています
・角印も作れます

取扱店：

柴舟（東京都江戸川区）
03-3613-2727
佐伯釣具店（神奈川県川崎市）
044-911-3722
SANSUI川づり館（東京都渋谷区）
03-3499-5025
フィッシング中原（神奈川県川崎市）
044-711-8266
鮒仙人（神奈川県川崎市）
044-287-7470

お問い合わせ、ご注文は各取扱店または下記HPまでどうぞ

office27
あとりえぐり

http://www.office27.com
E-mail:info@office27.com

平成15年6月1日発行（毎月1回1日発行）　第38巻 第6号　昭和41年5月4日第三種郵便物認可

へら鮒釣りの楽しさを追究し続ける…

へら鮒

Monthly fishing magazine herabuna

No.450
Jun.2003
6

西湖の藻場を知らずして、へら鮒釣りを語るなかれ…。
春の大本命「前浜」&「桑留比」パーフェクトガイド！
そして、名手・伊藤洋一が開幕直後の前浜に乗り込む！
超強烈、乗込み西湖べらの爆釣ポイント&爆釣法とは？

特集 西湖開幕スペシャル。

伊藤洋一

春の三島湖で粘釣！

スーパーアングラー小池忠教の

エサ合わせ大全

Tadanori Koike's Sence of Hera Bait !

新潟、大通川で野べらと出会う…

名手・石井旭舟がいく へら鮒出会い旅…

へらぶな浪漫街道

手賀南新堀で超大型が出た!?

山内研作・生井澤聡の

大型狙いの楽釣宣言！

加須吉沼で超絶バトル！

掛網 久の対決mode 1,2,3！

トーナメンター　チャレンジャー

古川 実vs寺崎智祥

特集Ⅱ

神の棲む湖に、取り憑かれし者達…。

神流湖 スーパーガイド

Spritual field,LAKE KANNA !

藤田 保&栗原盛行

超人気連載！ 杉山達也のスプラッシュビート!!

SPLASH BEAT Ⅱ

羽生吉沼、震撼す！　岩手桟橋、長竿両グル宙。その釣果とは…

杉山達也、splash!!

昭和41年5月4日第3種郵便物認可
第38巻第6号（毎月1回1日発行）
平成15年6月1日発行

厳しいときこそ、
ファイト！

休日、混雑時、食い渋りに「一発」！

厳選したきめ細かい麩を使用した、くわせエサ「一発」。ハリ持ちに優れているのでじっくりと待て、吸い込みやすさも抜群。休日や混雑時、食い渋りなど、ダンゴではどうしてもアタリが出せないようなときの、力強い味方です。極端な食い渋りには小さい粒を、ジャミの多い釣り場では大きめのサイズをお使いください。

●一発（中・小・極小・ミクロ）　各¥250

つれるエサづくり一筋
マルキユー

本社・桶川工場　埼玉県桶川市赤堀2－4　〒363-8509
TEL：(048) 728－0909(代)　FAX：(048) 728－3909
大阪支店　大阪府寝屋川市楠根南町12-14　〒572-0811
TEL：(072) 824－0909(代)　FAX：(072) 825－0909
四国営業所　香川県坂出市西大浜北3-4-33　〒762-0053
TEL：(0877) 44－0909(代)　FAX：(0877) 44－3909
九州営業所　佐賀県鳥栖市姫方町341-8　〒841-0023
TEL：(0942) 82－0909(代)　FAX：(0942) 83－0909

http://www.marukyu.com/　釣り場でエサに困ったらiモード・ホームページ　http://www.marukyu.com/i

定価　一〇〇〇円　本体九五二円

雑誌　07907－6

T1107907061000